ピアノ男ビデオズ報告書

2023年3月14日

文責　K.S

緒言 2
ピアノ男ビデオズ分析 3
ピアノ男ビデオズシリーズの概観 3
マスターテープ～本編—平成前期TVバラエティの模倣 4
違法版—違法様式的コピー 7
ピアノオトコビデオズ、 9
字幕組 10
第三者による二次使用 11
ピアノ男ビデオズの性質 12
違法と合法の狭間 12
ロバストな無害無価値 12
結言 14
求人 14
参考文献・作品 15

緒言

本報告書は、2019年5月より制作が続けられている『ピアノ男ビデオズ』作品に関する諸情報を編纂し、身も蓋もなく分析・報告することで、視聴者の一歩踏み込んだ作品受容の助けとなる事を目的としている。

第一章「ピアノ男ビデオズ分析」では、ピアノ男ビデオズシリーズを構成する作品群についての説明と分析を行いながら、シリーズの要点である「違法アップロード」「違法様式的コピー」などについて論じる。第二章「ピアノ男ビデオズの性質」では、ピアノ男ビデオズが何を志向しているものであるのか、違法アップロードを巡る議論やピアノ男当人による「無害無価値論」を援用して鍵を探ろうと試みる。

ピアノ男ビデオズシリーズは、シリーズがモチーフに据える概念の影響により、シリーズの全体像や、作品の主題や志向するものを把握することが多少難しくなっているのではないかと考えており、報告に至った理由の一つでもある。ただ、むしろその事が受容体験の質をある程度高めているのであって、本報告書が身も蓋もなく明かすことで質を損ねるといった意見があることは考えられる。本報告書を読むのは当然ながら任意であるので、いわゆるネタバレを好まない場合は次の章に進まないことを推奨したい。本シリーズを直観的にエンターテインメントとして消費することも肯定する。

ピアノ男ビデオズ分析

ピアノ男ビデオズシリーズの概観

ピアノ男ビデオズは、2019年5月2日にピアノ男のTwitter上でコマーシャル映像と共に放送開始が告知された。2019年5月8日にピアノ男ビデオズ第一回とされる映像が「ピアノ男ビデオズ」と名乗るYoutubeチャンネル（以下、本チャンネル）上にアップロードされ、当人を知る人々を中心に1万回以上再生がなされた。その後、一時は1年間ほどの休止期間を挟みながら『ピアノ男のカラオケレッツゴー』を含め5作品が投稿された（表1）。後に述べるように、ピアノ男ビデオズシリーズはこれら5作品のみで構成されるものではない。したがって、これら5作品は便宜上「本編」と呼ぶものとする。

表1　ピアノ男ビデオズ本編一覧

日付	タイトル
2019年5月9日	ハードオフビーツの巻
2019年7月15日	逆Tiktokの巻
2019年8月26日	Emang Gue Pikirin（ピアノ男のカラオケレッツゴー）
2021年8月15日	夏休み特別企画～作ってぶちあがろ～
2021年8月21日	ビデオ俳句「夏休み」

本編は、1990年代から2000年代にかけて放映されていた日本のバラエティ番組の様式をオマージュしている。動画内でピアノ男は毎回任意のテーマに沿い、出演者として番組をシミュレーションする。映像はマスターテープをコンポジット信号に変換し、再度ビデオキャプチャでキャプチャしているため、VHS特有の質感が映像全体に見て取れる。

本編の公開と同日、Chengshan shinを名乗るYoutubeチャンネルとnguyễn guchigang dp9を名乗るdailymotionアカウントによって、本編映像を違法アップロード動画の様式に加工した映像がアップロードされた。本様式で使用されている手法であるピクチャーインピクチャー（PiP）から、これをPiP違法版と呼ぶ。また、それらを違法アップロード動画まとめブログ風の様式でまとめたブログ「ピアノバラエティ動画無料視聴まとめ」が公開された（以降まとめブログと呼ぶ）[1]。これらは『ハードオフビーツの巻』と『逆Tiktokの巻』にて一連の操作が行われている。一連の操作はピアノ男による自作自演行為であり、ピアノ男ビデオズシリーズを構成する要素の一つである。

本編は最大で約1万回再生された後、2022年に本チャンネルから姿を消した。本編は2023年2月28日時点で未だ視聴不可能となっている。加えて、本編の基であるマスターテープは初めから制作者本人以外には公開されていない。その後、2023年2月9日から14

日にかけて、サブシリーズ『Pちゃんタイム2023』とPiP違法版がタイトル変更の上で本チャンネルに投稿された。17日には本編をサンプリングして制作された『ピアノオトコビデオズ、 part.1』が投稿され、20日にはPP字幕組によって本編『ハードオフビーツの巻』に中国語字幕が重畳された映像が本チャンネルとbilibiliに投稿された（字幕組版と呼ぶ）。

まとめると、ピアノ男ビデオズシリーズは図1のような構造となっている。矢印とその上部の文言は、終点にあるものを作成するため始点に行った操作を表す。先に述べたように、これらは全てピアノ男による自作自演である。ピアノ男ビデオズシリーズは本編のみで成立しているものではなく、むしろマスターテープから違法版などコピーを重ねた映像群までの過程・関係に主題がある。次節以降では、各作品についての分析とともに、その理由を述べる。

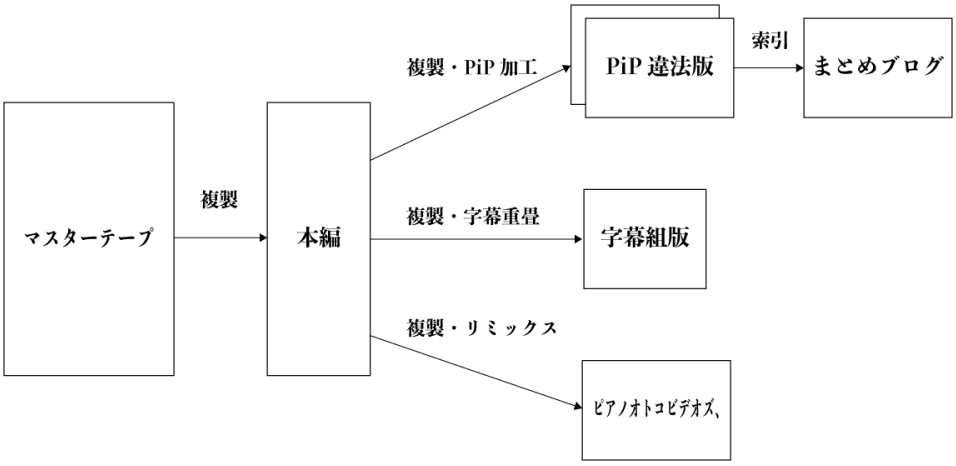


図1. ピアノ男ビデオズシリーズの構造

マスターテープ〜本編―平成前期TVバラエティの模倣

ピアノ男ビデオズ本編がオマージュ・シミュレーションする対象は、TVバラエティ番組である。TVバラエティ番組は、違法アップロードされる映像ジャンルの定番の一つである。本編自体の分析に取りかかる前に、まずはTVバラエティ番組が違法アップロードされる事の意味について述べる。

音楽や映画の違法アップロードも盛んであるが、TVバラエティ番組がメディアに記録された音楽や映画ととりわけ異なる点は、生放送を除き映画と同様のメディアに記録された作品でありながら、テレビ放送という仕組みが生む一回性による大衆の受容機会の少な

さであろう。番組アーカイブの重要性が意識された今でこそ、放送番組アーカイブの様々な取り組みがなされているが、1970年代までは放送用テープの高価さや法的制約により録画は積極的に消去・廃棄されていた。また、家庭でもベータ方式のビデオデッキが発売される1975年までは録画機器も高価で一般庶民が録画を保存することは容易でなかった[3]。そのため、受容機会という観点では音楽演奏や演劇といった上演芸術に近く、演劇などは上演期間中チケットを何度も買えば概ね同様の内容が鑑賞できることを考慮すると、むしろそれらよりも機会が限られたものであった。

ビデオデッキ発売以降、大衆は番組映像を複製することが容易になり、テープが擦り切れるまで繰り返し受容することは可能になった。しかし、それは受容者が能動的に複製保存しなければ叶わない話である。レンタルビデオ店を利用するという選択肢もあるが、アニメやドラマ、映画と比較するとビデオ作品化されている番組は恐らく少ない。またTVバラエティ番組の特徴として、包括契約している著作権管理団体が管理する、第三者が権利を持つBGMを利用することが多く、そのクリアランスの問題から別の音源に差し替えられることもあり、同一性が担保されない。

Youtubeといった動画共有サイトの登場以降、受容者側に蓄積されて続けている複製テープは全世界にインターネットを通じて解き放たれることとなった。その理由は私利私欲の手段や個人的なアーカイブ、義賊的な善意など様々だろう。数十年も前の、放送局も保有していなかったような昔の貴重な映像もあれば、昨日今日の新しい番組も違法アップロードされている。これによって受容者は、倫理的・法的な問題を抱えつつも多くのTVバラエティ番組の一回性から開放されることとなった。

近年は、多量に行われてきた違法アップロード行為を受けて、放映後一定期間ウェブ上で映像が視聴可能な「見逃し配信動画サービス」が発展し、放映されたばかりの番組をアップロードする意義は以前より薄くなった。一方で昔の番組はというと、放送局によっては一部をウェブ上で公開していたり、アーカイブ映像を積極的に販売する流れもある[4]が、それらは膨大な番組群の一部でしかないし、娯楽感覚で視聴するにはいささか高額な料金を支払ったり、局とかけあったりすることのハードルも低くはない。前述のように局にすら保存されていない番組映像もある。そういった入手難度の問題や、既存の動画・音声を編集し再構成する「MAD動画」やミーム文化の相互的な発展も恐らくアップロードに拍車をかけているだろう。これらのことから、昔の番組の違法アップロード動画には、単に「お金を節約したい」といった窃盗的な思考とは少し異なった需要も多いと考えられる。そして権利者がそういった事情を汲んで黙殺しているのか、単に管理が行き届いていないのかは我々の知る所ではないが、今も多くの古きTVバラエティ番組が動画共有サイトで視聴可能な状態となっている。これらを視聴することは本来、倫理的にアンダーグラウンドな行為ではあるものの、その再生数やミーム現象、しばしば著名な芸能人が放送で違法アップロード視聴して”しまって”いることを公言している[5]事が散見され

ることからも、アンダーグラウンドとは言いにくいほど大衆に広まっている様子が窺える。

ピアノ男ビデオズ本編がTVバラエティ番組をオマージュ・シミュレーションする理由は、テープに複製されたTVバラエティ番組がまさに違法アップロードというモチーフに重要な象徴であるからであって、テープに複製されたTV番組の様式を模倣することや、その方法論にピアノ男ビデオズシリーズは重点を置かない。ピアノ男ビデオズ本編は2019年に制作された作品であるが、概ね同時期にフィルムエストTVやlilsomといった作家たちが意図的にVHS時代の視聴覚的特徴を持たせた映像作品を手掛けている。さらに遡ると、多摩中央テレビは2015年頃、AMR姉貴は2013年頃より同様の特徴を持たせた作品を手掛けていることから、その様式を模倣すること自体は方法論的に追求の余地はあるが、模倣行為自体が新規性のある行為ではないといえる。

上で述べた理由から、本編の視聴覚的特徴や番組構成については主要な要素ではないものの、平成前期TVバラエティ番組らしさをたらしめるものでもあり、それは違法アップロードを象徴するものである。したがって、いくつかの特徴についても言及する。

本編のシリーズ全てに言える特徴として、マスターテープ映像がコンポジット映像信号に変換されたものをビデオキャプチャでキャプチャしたことに起因する、本来ならば映像の歪みとして補正されるべき効果が付与されている点が挙げられる。それはマスターテープと本編を比較するとより明らかになる（図2）。具体的には、色彩の変化、アスペクト比の僅かな変化とそれに伴う左右の黒い縁、デインターレースが施されていないために生じるコーミングノイズ（図2(b)の手に生じている縞模様）である。違法アップロードを担う者の幾らかは恐らく映像技術に対して見識がないか、あるいは余計な手間を省くため、しばしばデインターレースなどの補正が施されていない違法アップロード動画が散見される。本編は、そうした状況をシミュレーションしていると言える。

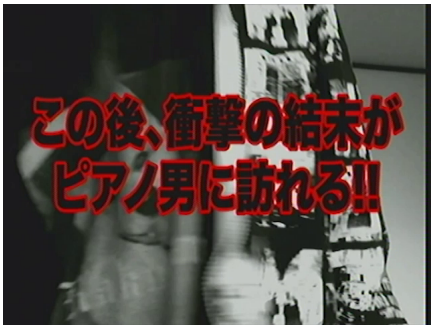
『ハードオフビーツの巻』や『逆Tiktokの巻』で特徴的な点として、テロップが挙げられる（図3）。これらの縁取りや文字サイズ、色などの装飾は日本のTVバラエティ番組を特徴づけるものである。時代によってこの装飾の様式は変わり、特にこれら2編は、1990年代後半～2000年代初頭に放送されていたTBS系列『ガチンコ！』や『学校へ行こう！』、その他当時の様々なTVバラエティ番組の様式を模倣したテロップや装飾を多用する。このことからも、違法アップロード動画の象徴である平成前期TVバラエティ番組を想定したシミュレーションであることが窺える。

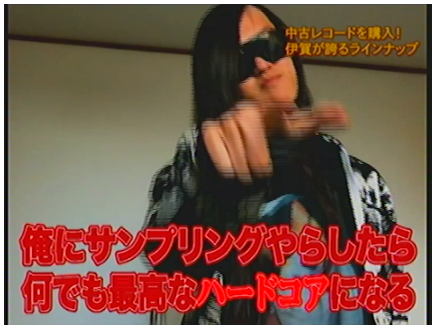
ここまで、本編とマスターテープの境界を曖昧にして述べてきたが、実際の所、TVバラエティ番組の様式を付与しているのはマスターテープの段階であり、本編はそれにビデオキャプチャ操作やエンコードで発生する視覚的特性を付与したのみである。本編の段階から違法様式的コピー、ないし違法様式的合法アップロードは既に始まっているのである。次節では、違法版の分析とともに違法様式的コピーについて述べる。

(a) マスターテープ

(b) 本編

図2. マスターテープと本編の比較





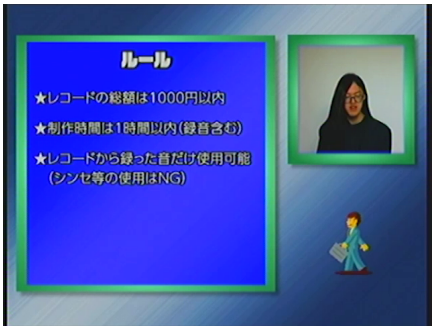


図3. TVバラエティ番組を模倣したテロップ

違法版―違法様式的コピー

違法アップロードとは、第三者が権利を保有する著作物を権利者に無断でファイル共有ソフトや動画共有サイト等にアップロードし、誰もが見られる状態にする行為である。また、その行為によって複製されダウンロード及びストリーミング視聴が可能となった動画ファイルを違法アップロード動画と呼ぶ。このうち、権利者に無断で著作物を複製して披露という部分に、まずは焦点を当てる。

権利者の許諾なく作品を複製したものを、レプリカや海賊版のようにただ作品の複製品として扱うのではなく、自覚的にその作品イメージを借用（あるいは盗用）して自身の作品に取り入れる技法がある[6]。ストリートの文脈ではヒップホップやハウス・ミュージックなどの「サンプリング」に、現代美術の文脈では「シミュレーショニズム」と呼ばれる動向に見ることができる。マイク・ビドロ（mike bidlo）は「NOT ○○」というタイトルと共に、ピカソやポロックなどの名画をそっくり模写する（○○には模写対象の作家の名

前が入る）。シェリー・レヴィーン（Sherrie Levine）やリチャード・プリンス（Richard Prince）は第三者の有名な写真作品を撮影し、複製して自身の作品として発表する。このような技法は「アプロプリエーション」と呼ばれる。

マスターテープを除くピアノ男ビデオズシリーズは、基本的にこの技法を意識して制作されるものであるが、根本的に異なるのは複製元の作品の権利者が自分自身であるということだ。サンプリングやアプロプリエーションなどの技法は、他者の作品を利用するものであって、権利者の許諾が得られているかパブリックドメインとなっている場合を除いて違法な行為とされる。一方で、自身が権利を保有する作品を自身で利用することは、「他人のもの」という前提が否定されるために盗用とするのは難しく、違法とは言い難い。コピーではあるが、合法である。

ところで違法アップロード動画には、複製元の動画や権利者公認のもと公衆送信された動画には見られなかった特有の様式がある。それは視聴覚的特徴上のみならず、題名や作品が置かれている場所など様々な要素に及ぶ。これが起こる原因にはおおよそ３つある。一つは技術的制約や複製者の無知・手間の省略による複製時の歪み、もう一つは字幕など視聴者の作品受容を助ける加工、そして最後は動画共有サイトの自動コンテンツ識別システムを用いた著作権保護システムを回避するための加工である。ピアノ男ビデオズシリーズは、合法コピーでありながらもこれらの違法アップロード動画特有の様式を取り入れる。これを違法様式的コピーと呼ぶ。

PiP違法版は特に「動画共有サイトの自動コンテンツ識別システムを用いた著作権保護システムを回避するための加工」を意識的に取り入れる（図4）。例えばYoutubeでは、アップロードされた動画を著作権者によってYoutubeに送信された音声と映像のデータベースと照合し、一致が見つかった場合に著作権者の設定に応じて何らかの対応を取る「Content ID」という仕組みがある。動画への加工は、データベースとの一致を避けるためのものである。視聴覚的特徴の面では、ある動画内に別の動画の表示領域を設け、両方の映像を同時に表示させる「ピクチャーインピクチャー」や、動画・音声速度の変更の操作がなされている。加工以外の面では、適当なアカウント名やdailymotionといった権利者に発見されにくいオルタナティブなウェブサービスへの同時投稿、タイトルやキャプションへの冗語の付与などがある。ピアノ男ビデオズは投稿者本人が権利を有する映像であるから、そのような細工をせずとも綺麗なマスターテープの映像をそのまま掲載しても良いはずである。それにも関わらず違法様式の効果を映像に施してアップロードする事は、自動コンテンツ識別システムによる検知を回避するという本来の意味を剥奪し、この様式を意識的に形骸化する。

自覚的に違法様式を取り入れた作品はピアノ男ビデオズにしか見られないものではない。テイコウペンギン[7]やちくわ[8]は、こうした違法様式の視聴覚的特徴を、あるあるネタとして風刺するべく自作の映像に取り入れる。藤原麻里菜は、ピクチャーインピク

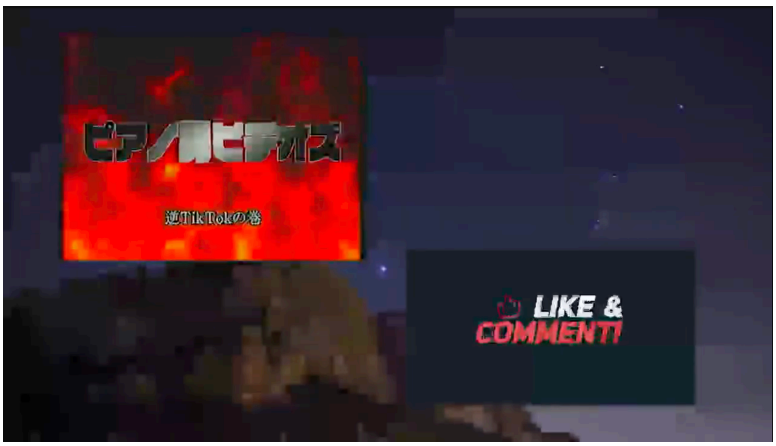


図4. ピアノ男ビデオズPiP違法版

チャー手法を物理に拡張した『違法アップロード型テレビ』を提案している[9]。ピアノ男ビデオズシリーズがこれらと異なる点は、違法様式の視聴覚的特徴のみをモチーフに据えるのではなく、マスターテープが複製され、複製物がさらに複製されるといった違法アップロードで生じる過程、ないしその過程で生まれる痕跡がモチーフであることだ。それを強固に示すのが、図1でいう『まとめブログ』である。

違法アップロードをめぐる議論で加えて問題となっているのが「リーチサイト」の存在である。リーチサイトとは、違法アップロードがされたサイトに利用者を誘導するため、違法アップロードされた著作物へのリンク情報を複数掲載するウェブサイトを言う。リーチサイトは2020年の著作権法改正により、違法アップロード行為同様刑事罰の対象となった。ピアノ男ビデオズの『まとめブログ』は、このリーチサイトに見られる特徴を取り入れ、Youtubeおよびdailymotionに投稿された違法版へのリンクを提供する。ただし、違法版が合法コピーであったように、本ブログが指し示す動画も本人が権利を持つ動画であるため、違法様式を持つ合法リーチサイトとなる。

ピアノオトコビデオズ、

『ピアノオトコビデオズ、 part.1』は、K.K.による映像作品『ワラッテイイトモ、』をオマージュしたものである。『ワラッテイイトモ、』はテレビ番組『笑っていいとも！』の映像・音声をサンプリングし、リミックスした映像を使用している。本作はキリンアートアワード2003にて審査員満場一致で最優秀賞を獲得した[10]ものの、著作権・肖像権を侵害する恐れから審査員特別優秀賞に変更され[11]、受賞作品展では修正版が公開されたという[12]。この年のアワードでは、『ワラッテイイトモ、』以外にも東野哲史による『W.D.Y.G. カタルシス』がドラマ水戸黄門をサンプリングしていることで、奨励賞の代わりに審査員特別奨励賞が与えられ、展覧会でも修正版が公開された。なお、キリンアートアワードは翌年開催されておらず、2005年にはキリンアートプロジェクトと形式を変

え、以降は開催されていない。『ピアノオトコビデオズ、 part.1』のサンプリング元は本人が権利を持つ映像であり、仮に何らかの公募に出展したとて上のような問題が生じる蓋然性は大変低いだろう（Youtubeのプレミア公開カウントダウンをサンプリングしている部分は問題であろうが、この部分を修正したとて『ワラッテイイトモ、』の修正版に相当するほど印象が変わるものではないと思われる）。

ところで、『ピアノオトコビデオズ、 part.1』のオマージュ先は厳密には『ワラッテイイトモ、』というよりは、matsukinと名乗るアカウントによってYoutubeにアップロードされた複製『ワラッテイイトモ、 part.1』であり、これは『ワラッテイイトモ、』を5つに分割したものの前半8分である。『ピアノオトコビデオズ、 part.1』の構造も、一人の人物による語りから始まり（ただしここで考察動画を想起する様式をとる）、サンプリングされた映像は出演者が言葉を発さない部分のみを用いて再構成する、『ワラッテイイトモ、part.1』で切り取られている前半8分の構成の借用にとどまる。matsukinがK.K.であるかどうかは不明（恐らく異なる）だが、これがK.K.の許諾を得たものでない場合、違法アップロード動画のオマージュということになる。一方で、『ワラッテイイトモ、』自体も前述の通り『笑っていいとも！』の権利者の許諾なくサンプリングをしている。つまるところ、『ピアノオトコビデオズ、 part.1』は「違法にサンプリングしたものをリミックスした作品を違法アップロードした動画の様式を合法的な素材でオマージュして制作した作品」となる。事態は多層的にもつれている。

字幕組

『字幕組版』は、文字通り「字幕など視聴者の作品受容を助ける加工」を意識的に取り入れたものである。ある映像作品に対して、非公式に字幕を付与する愛好家たちのことを欧米圏では「ファンサブ（fansub）」、中国語圏では「字幕組」と呼ぶ[13]。『字幕組版』は中国語圏における本現象の様式を取り入れた形となっている。

欧米圏や中国語圏を問わず、アニメ同様に日本のTVバラエティ番組のいくらかは愛好家たちによる翻訳の対象となっている。翻訳された動画は、オンラインでは愛好家たちのBBS（中国語圏では論壇という）やIRC、P2Pファイル共有ソフトで流通されるが、Youtubeなどの動画共有サイトに転載されるケースも多い。

『字幕組版』はこうした動画共有サイトに転載された翻訳動画に焦点を当てる。『字幕組版』ではPP字幕組と名乗る架空の字幕組を組織し、中国語話者でない作者は実際に中国語話者に翻訳作業を分担して制作している。主要な視覚的特徴は、明朝体（宋体）による字幕、画質の劣化、アスペクト比の歪み、右上の「訧酷」の文字であろう。

実のところ、中国の字幕組による翻訳動画で明朝体が使われるケースはそう多くはなく、特にアニメなどにおいては原作の雰囲気を尊重した字体・配色が用いられる傾向がある[13]。典型的な中国語字幕付きの違法アップロード動画と聞いて明朝体の仰々しいイ

メージを思い浮かべるのであれば、例えば台湾の緯来日本台は公式に日本の番組を字幕付きでテレビ放送しており、字幕は白地に黒縁の楷書体を用いている。放送の録画はしばしば無断で動画共有サイトにアップロードされている。

「訧酷」の文字は、明らかに中国の動画共有サイト・youku（优酷）から転載された動画のパロディである。Youtubeでは、youkuにアップロードされている日本TVバラエティ番組の翻訳動画を転載した動画がしばしば見られる。youkuでは右上に「优酷」の文字がオーバーレイされるが、転載時に文字がそのまま残った結果である。

ファンサブや字幕組、公式を問わず翻訳動画は、動画共有サイト（特にYoutube）への転載によって、異国語のコンテンツをただただ受容するという本来の目的を超えた現象を生じる。一つは、リアクション動画と呼ばれるジャンルである。リアクション動画とは、他者の動画・音楽などを視聴しながら、それに対する反応を示す動画だ。日本のバラエティ番組は特に日本国外のYoutuberによるリアクション動画の題材として使用されることが多く、「海外の反応」として日本人向けに日本バラエティ番組のリアクション動画を制作しているYoutuberも少なくない。リアクションに用いるバラエティ番組の素材は違法アップロード動画が多くを占め、翻訳動画によって日本語が堪能でないYoutuberにも門戸が開かれている。

もう一点は、翻訳元の言語、つまり日本語を母国語とする集団による受容である。このことは動画へのコメント欄から察することができる。元は母国語の映像なのに字幕が付与された映像を視聴するのはなぜか。視聴したい過去のバラエティ番組へ容易にアクセスできる手段がその動画共有サイトに転載された翻訳動画であった、という所が実情だと思われる。『字幕組版』は中国語話者の協力によって自主的に簡体・繁体中国語に翻訳されYoutubeとbilibiliにアップロードされたものの、これが中国語話者によって受容されているかは不明である。2023年時点では日本語話者の集団による受容が大半を占めている。2023年現在、『本編』は視聴不可能となっているため、もっとも『本編』に近い形式で視聴可能な映像は『字幕組版』と、上で述べたことと同様の状態が生じている。この先、字幕が単なる不要な装飾として形骸化したままとなるか、字幕が本来持つ役割を果たすのかは、これから中国語を母国語とする集団で本作が広まるかどうかにかかっている。

第三者による二次使用

僅かではあるが、ピアノ男本人の意思とは無関係に第三者による作品の二次利用も発生している。一つはミーム画像としての利用で、過去数件発見された。もう一点はBatsuによる音MAD動画である[14]。違法様式的コピーの合法動画が、実際に違法コピーされた事例と言える（ただし、ピアノ男はこれらについて著作権侵害を理由に訴訟することはない）。

ピアノ男ビデオズの性質

違法と合法の狭間

違法アップロードは名の通り、法的には善悪で見れば悪である。しかし前章でも述べたように、数十年前のテレビ番組といった視聴が困難であったコンテンツへ大衆は容易にアクセスが可能になり、資料としての活用や新たな文化の醸成など、倫理的にも全面的に悪であるとは言い難い側面がある。高橋はこれについて、「“個人の記録”にすぎなかった文化の痕跡を忘却の彼方から救出し、“集団の記憶”として保存／共有／継承できるようになった」のであるとする[15]。そこから、著作権を無視することまでは推奨しないものの「インターネットの世界における文化の保存／共有／継承を考えたとき、私たちは公開＝犯罪／共有＝違法という20世紀的なパラダイムから早急に脱却しなければならない」と指摘する。

ピアノ男ビデオズは、違法アップロード行為が持つ法的な違法性の脱色を試みるものであった。事実、著作権法上の問題は概ねクリアされている。しかし、違法アップロードの「文化の保存／共有／継承」の側面に目を向けると、そもそも自身の作品をそのままアップロードすればよいのであって、違法様式に加工することはマスターテープとの視聴覚的な同一性から距離を生んでいる。違法アップロード行為の違法性が脱色されるとともに「文化の保存／共有／継承」の側面も喪失してしまっていると言える。

ロバストな無害無価値

ピアノ男は、作品の「弊害（有害性）」と「価値（有用性）」について、あらゆる観点から見ても安定して「無害かつ無価値」な作品を作るべきであるとの方針を取る[16]。例えば芸術的観点で価値があるような芸術作品は、工学的観点への視座変換を行った時に、直接何かの役に立つものではないといった理由から無価値となる場合がある。このような任意の観点から別の任意の観点への視座変換を反復しても、安定して「無害かつ無価値」（＝ロバストな無害無価値）である状態を目指す。

違法アップロード行為は鑑賞者の視座から見れば「文化の保存／共有／継承」の側面から有益ではあるものの、作家に報酬が行き届かなくなり、コンテンツの供給がいずれ減少していく「有害有価値」と言えるかもしれない。作家の視点から見れば「有害」であることには変わりなく、有用性は違法アップロードコンテンツの拡散のされ方や制作年などの要因によって有価値な場合もあれば無価値な場合もあるだろう。ピアノ男ビデオズはどうか。ピアノ男ビデオズの違法様式的コピー行為は、違法アップロード行為が持つ違法性の脱色とそれに伴う「文化の保存／共有／継承」の側面の喪失により、これらが原因の有害性・有用性は失われる。かといって鑑賞者・作家から見て「無害無価値」な行為になったとの判断は早計であるし、どの観点への視座変換を行ってもロバストに無害かつ無価値であるとの判断もできない。視座のバリエーションは膨大であることや、無害無価値の安定

性を持つこと自体に何らかの価値が生じる可能性から、無害かつ無価値でない視座がある蓋然性のほうが極めて高いだろう。それでも「無害かつ無価値」な作品を目指すのは、意味の決定（停止）を目指すのではなく、運動を無限に反復する営み自体が肝心なのであり、ピアノ男ビデオズも手を変え品を変えコピーを続けていくのだろう。

結言

ピアノ男ビデオズシリーズはTVバラエティ番組の模倣を主題に据えたり、その方法論の追求を志向するものではなく、違法アップロード行為の違法性を脱色したシミュレーションであって、その反復によって「無害かつ無価値」な作品を追求していく試みでもあると考察した。こうした試みに何の意味があるのか、何を得られるのかは全く分からない。そういった事について、さほど関心がない可能性もある。このように先行きの全く見えない中でもピアノ男ビデオズは様々なコピーの反復を当面は続ける予定である。

求人

本報告書をもとに、Youtubeの漫画動画や、ゆっくり解説動画を制作して頂ける方を募集しています。漫画の場合、動画化せず漫画データのみを作成して頂ける方でも可能です。報酬金額は要相談。info@pianoid.netまでご連絡下さい。

漫画動画の例: https://www.youtube.com/@user-qb9xr9oq1z

参考文献・作品

1. ピアノ男. ピアノバラエティ動画無料視聴まとめ. 2019, https://pianovarietydouga666.blog.fc2.com/
2. Chengshan shin. 2019, https://www.youtube.com/channel/UCGTN-MqC5V5AnbWa2oo7QeQ
3. 滝沢修. テレビ五十年と番組保存. 京都大学工学部電気系工学教室同窓会「洛友会」会報 平成15年1月号. 2003, http://www.asahi-net.or.jp/~uk9o-tkzw/tvrakuyu.html
4. 昭和の報道動画など、アーカイブ映像を日本テレビが売り出した理由. amana INSIGHTS. 2018-12-21, https://insights.amana.jp/article/24346/
5. 嵐・櫻井翔の“違法アップロード動画”視聴をaikoが暴露！. 週刊実話WEB. 2023-02-22, https://weekly-jitsuwa.jp/archives/95396
6. 椹木野衣. 増補 シミュレーショニズム ハウスミュージックと盗用芸術. 筑摩書房, 2001, 416p.
7. テイコウペンギン. 【アニメ】テイコウペンギンが違法アップロードされました。. 2022, https://www.youtube.com/watch?v＝bEtjwARLDes
8. ちくわ. 違法アップロード動画あるある. 2022, https://www.youtube.com/watch?v＝0q0NoP8_3Ew
9. 藤原麻里菜. 合法なのに違法アップロード感があるテレビを作ろう. 2021, https://www.youtube.com/watch?v＝gHpfIQ4iKZA
10. 五十嵐太郎. 白昼の怪物――彼岸と接続されるテレビ＜個室＜都市＜テレビ. 10＋1 DATABASE. 2003, https://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/1138/
11. キリンアートアワード2003審査員総評. 2003, https://compe.japandesign.ne.jp/report/kirinaward03/sohyo/sohyo.html
12. 「ワラッテイイトモ、」展@appel. 2004, http://www.asahi-net.or.jp/~pm6m-nsn/text/iitomo.html
13. 湯天軼. 字幕という形象，翻訳という享受 : 中国における日本アニメ字幕組とその翻訳形式について. 日本学報, 2017, 36号, p.19-36.
14. Batsu. 2019, https://twitter.com/Batsuxxxx/status/1150784808533889024,
15. 高橋幸治. “Youtubeへ違法アップロードが気持ち的にダメと言い切れない理由”. ASCII.jp. 2016-02-24, https://ascii.jp/elem/000/001/124/1124368/
16. ピアノ男. 無害かつ無価値を目指して. 2023, https://pianoman.hatenablog.com/entry/2023/01/21/025658

*Webページは全て2023-03-12に参照